

【始まりの狼煙は、紅い杯】

「タタル・タル！ 一世一代の迷子物語なのでっす…！」

私はリセさんからアラミゴ奪還の吉報を受けて、近いうちにまた海を渡りアラミガン・クォーターまで会いに行く約束をしていました。

とはいえ、今私がいるクガネはオサード小大陸にあり、アルデナード小大陸に戻るにはもう一度大きな船で大航海をしなければいけません。

それはつまり、暁の皆さんや冒険者さんたちとした大冒険をもう一度味わえるということです。私はトキメキ・ドキドキで胸が高まっていました。

そう、数時間前までは……。

意気軒昂だった過去の私に、こうして半ベソをかいている未来の私を想像出来たのでしょうか……。

こちらでの諜報活動や、ハンコックさんとの情報交換、クガネの内部情勢を調べるお仕事も一段落して、いよいよエオルゼアに帰れる休暇が取れそうでした。

私のウキウキ・ワクワクは最高潮、みなさんがいるアルデナード小大陸への帰船を明日に控え、楽しみ過ぎて目を閉じてもしばらく寝付けなかったのは内緒です。そんなフワフワした夜でした。

天気快晴、沿海良好。船出は穏やかに、それでいて大航海の帆を張るように、私の背中を優しく押してくれたのでした。

大航海の後にリムサ・ロミンサで一泊しました。カルヴァランさんたちとクガネ行きの時に見舞われたようなトラブルもなく、ハラハラしない航海は一人旅というのも相まって、とても新鮮に思えました。

丁度この季節は【紅蓮祭】が開催されていて、街中も遅くまでキラキラしていました。寝る前にコスタ・デル・ソルまで足を伸ばしてみると、浜辺で輪になって盆踊りをする人たちがいたので、私もちゃっかり参列して踊っちゃいました。ポムポム！

次の日、飛空艇を乗り継いでグリダニアまで移動しました。夜の移動になると怖いので、ここでもう一泊です。ヤ・ミトラさんに会いにアップカル滝まで行ってみました。考えてみたら今はヤ・シュトラさんを看にルールガーズリーチに行っているのです。うっかりうっかり。せっかくなので、ちゃぷちゃぷ池でちゃぷちゃぷしておきます。

そんなところへ、カ・ヌエ様がいらっしゃって近況を少しお話ししました。アラミゴの動向などは、すでにナナモ様から伝え聞いていてリセさんに言伝を頼まれました。

これからは暁の一員としてではなく、アラミゴの民として同じエオルゼアに住む者同士、手を取り合ひましょう……という、リセさんを応援する賛辞の言葉でした。

一夜明けて、さあいよいよアラミガン・クォーターに向けて出発です。ここからはチョコボに乗って陸路を移動します。

カストルム・オリエンスからチョコボ・ポーターを利用してグラバニアの台地を踏みしめました。

ピーリングストーンズを経由して山岳地帯へ。一度、アラギリで小休止を取ってからニユンクレフの箱舟を横目にマントヨーンを越えて湖畔地帯に入ります。

ロッホ・セル湖でルールガー像やテオドリック像を眺めてから、いよいよギルバルド門に辿り着きました。

……ここまでが私の、楽しい楽しい冒険譚。あとは語るも不気味な迷宮に迷い込んだのでした。まる。

「リセさああああああん！ アラミゴ迷宮なんて聞いてないでっすー！」

歩いても歩いても同じ風景ばかりで、さっき通った道と思ったら同じ場所に戻ってきて……。

アラミゴより遥かに大きいウルダハですら迷ったことがなかったのに、どうしてアラミゴは私を歓迎してくれないのでしょうか。

天に嘆きを轟かせた私の声は、二度三度木霊して周囲の視線を一気に集めたのでした。すると……、

「……花、びら……？」

私の額に一片の赤い花びらが舞い降りてきました。それは羽根のように軽く細長く、見惚れるくらい色鮮やかな深い紅でした。

見上げればブルードロップを溶かしたような青空と、パールチョコのような白い雲。美味しそう。……じゃなくて、一目見てそれが何の花びらなのか分かりませんでした。

この花びらが空から降ってきたのではないとすると、同じ外観のはずなのに不思議とこの建物の屋上が気になったのです。

「すみません、この建物の屋上には何があるんですか？」

「この上には……ご覧になりますか？ どうぞ」

兵士さんは何があるのかは教えてくれませんでした。ニコやかに私を屋上へ案内してくれました。聞けば兵士さんは屋上への案内係のようで、最近になってこの場所が解放されたそうです。

初めのうちは閉鎖されていたらしいのですが、アラミゴが帝国領から解放され歓喜の中でポツポツと声が上がりました。この美しい場所を、外の人たちにも見てもらったらどうか。ここはきっと、アラミゴを象徴する場所になる。そんな場所をその目に焼き付けてもらいたい……。

その声は次第に大きくなり、リセさんの意向もあって一般開放されるに至ったのでした。

その場所の名前は……「空中庭園」——。

「……あ……」

私は言葉を失ってしまいました。

視界に広がった世界は、私を拒絶することなく穏やかな風が背中に手を添えてくれているかのように、温かく迎えてくれました。

どこまでも見渡せるオサードブルーの青空はきっと、遥かクガネまで続いているでしょう。

それは悠然。激動の歴史を歩むアラミゴをずっと見守り続けた懐の深さを物語っていました。寄り添うように浮かぶアッシュグレイの白雲は、そんな慌ただしい時代を必死で生き抜いてきた人々、街の姿なかもしれないと漠然と思いました。

しかし、荒々しい時代や物寂しい荒野の印象が強いアラミゴには、気高く美しく、健やかな芽があることを私は知らなかったのかもしれませんが。足元に絨毯のように広げられたガーベラの花々は、およそ剛健なルールガー神とは似ても似つかないでしょう。

ただ、時代は移り変わり、リセさんを象徴とするような力強い赤は、これからの新しいアラミゴを形作る礎のように感じました。決意や、直向きな眼差しが、常に前を見て生きようとするリセさんを祝福するかのよう、赤い、紅いガーベラが咲き誇っていたのです……。

「神秘的、でっす……」

それだけじゃありませんでした。ポツポツと色違いのガーベラが顔を覗かせています。それは、美しさや、親しみや、我慢強さ……。

それら一つひとつが、小さくて、大きい「希望」でした。こんな場所、私は見たことありません。いくら私がどんな言葉で表そうとしたところで、この庭園のすべてを伝えきることは出来ないでしょう。

でも少しだけ分かった気がします。ここが屋上でありながら、別世界であるかのような「空中庭園」と呼ばれている理由が……。

「よお、タタル。長旅ご苦労さん」

景観に目を奪われていたせい、先客がいたことを今になって気が付きました。声色からすぐに男性であることは分かりましたが、その声を私は知りません。けど、相手は私を知っているようでした。

「っしょっと。こいつはすげえや」

敷き詰められたガーベラの絨毯を縫うようにはしる水路。それをまたぐように掛けられた小さな橋があります。

その橋の階段にドカッと腰かけた人は、異国風の唐傘を被り刺繍の美しい赤い装束を着て、履物はラフな草履でした。その出で立ちほまさに、クガネに住まう侍の様相でした。

侍さんは私に背を向けていましたし、唐傘を深く被っていて表情は窺いしれません。

名前を聞こうと近づいた時……、

「始まったな」

「……え？」

その言葉の意味は分かりませんでした。侍さんの持つ独特の雰囲気におされて名前も聞けずにポーッと眺めてしまいました。

「アラミゴの古い時代が終わり、リセたちが作る新しい時代のアラミゴが始まった。それに伴ってラウバーンが抜けたことにより、ナナモ女王とピピンたちが作るウルダハも変わっていくだろう。ドマ城を落とした今、ヒエンが切り開く未来も見物だ。そうかと思えば、終節の合戦で最弱と呼ばれたモル族がアジムステップの覇者となった！ 多くの者たちが、前に進む時代さあ！

こいつあめでたい！」

どこに隠し持っていたのか、一升瓶と真っ赤な酒器を取り出して、よもや祝杯をあげるように見えました。

「しかし、勝者がいれば敗者が居るように光の差す場所があれば、陰が落ちる場所もまた然り。時代に選ばれなかった者たちがいたことを、俺たちは忘れちゃいけない。ゼノス、ヨツユ……そして、フォルドラ。彼らを憎むものは大勢居たことだろう。犯した罪が消えることはねえからな。勝者に拍手贈るものあれど、敗者に賛辞祝すものなし！」

確かに悪いことをした人を裁く為にルールがあるなら、それは当然の禊で、甘んじて受け止めなければいけないと思います。どんな大義名分を掲げようと、人々を虐げ、悪政に手を染めた人を許すわけにはいきません。

でも……かつて、ミンフィリアさんは私にこう言いました。

——罪を憎み、人を憎まず——

あの人は悪い人だ嫌な人だと、ヒトは誰かに罪を押し付け合う生き物です。でも、かつてはみんな無垢な赤子だったはずです。育った環境や、受けた影響や、掛けられた言葉から人格が変わってしまいます。そのどれもが言い訳なのは分かりますが、人道を踏み外した瞬間、その人が悪となってしまふ……。

それでもミンフィリアさんは、人を憎んじゃいけないと教えてくれました。その慈愛に満ちた表情を今でも覚えています。

同じ雰囲気、この侍さんから感じ取ることが出来ました。

「乾杯」

紅い酒器を右手に軽く掲げて、居ない誰かに杯を交わしたように見えました。まるで自分は、後者であることを示すように……。

「ああすまねえ。しみつたれた話がしたいわけじゃねえ。彼らの未来に幸あれ。みなが同じように前を向いて歩いていこうってんだ。彼らだって生き残った。生きてい

なら、未来はどうあれ進むしかねえのさ」

「……分かる、気がします。私も、私の身近にも待っている人が居ますから」

侍さんはチラッとこちらを向いて、目元は唐傘で分かりませんが口元だけ笑っているようでした。

「なあタタル、こうは思わねえか。時代が変わったから人が変わるんじゃないか。人が変わろうとしたからこそ、時代が移り変わるって」

それは……そうかもしれません。確かに災厄によって区切りが生まれたこともあるかもしれませんが、その時どこかに人の意志が関与していたはず。それこそ、ルイゾワさんやシャーレアンの人々、そして……。

「起こっちゃったことは酒の肴にでもすりゃいい。そうしてまた、始まりの狼煙を上げようぜ！ 始まりなんぞ、人生で何度あったっていいんだ！ でもその時、何かを変えようとする己の意志が必要だけどな。時代が勝者を選ぶことはあるだろうが、時代を作っていくのは、いつだって人だからよお！」

「そう、でっすね……」

侍さんはどこか嬉しそうに語ってくれました。

それは紛れもなく、祝杯でした。勝者も敗者も、みんな同じ人です。時には、後戻りできず命を落としてしまう人や、最後まで義を貫き通して姿を消してしまう人が

いましたが、そのすべての人たちに紅い杯を。

そんな別の世界へ旅立ってしまった人たちへも、侍さんは等しく始まりの狼煙を上げようと言ってくれたのでした。

「俺の師は“侍の大義にかけて、悪を許さず、と教えてくれた。その心は……罪を憎み人を憎まず。ゆく時の流れは絶えずして、しかももとの世にあらず。時代の中にある人とこころと、またかくのごとし！」

え、それって——。

「タタルー！ ごめんねー！ おまたせー！」

振り返ると、いつもの綺麗な笑顔で手を振るリセさんが駆けてきました。私も大手を振って応えます。

ふとして侍さんの方へ向き直った時には、まるでそこには誰も居なかったかのように日の当たるローズピンクとボーンホワイトの鮮やかなタイルがあるだけでした。

すべては風に遊ばれて飛んでいった、紅い花卉だけが知っている気がしました……。

「どうかした？ あ、この庭園綺麗でしょ？ 私も好きなんだー」

「……はい！ とっても、素敵な場所です……」

「他にも案内したい場所もあるし、あ、その前に何か食べに行こうよ！」

手を引いて駆け出そうとするリセさんに、私は立ち止まってから、一つ狼煙を上げることにしました。

「リセさん！ 聞いてくださいです！」

「ん？ どうしたの、タタル？」

みなさんが、これからも前を向いて進んでいきますように……。

「私、これからもみなさんを応援するために……唄を作ってみようと思ひます！」



——Tataru's Fleeting rest.

あとがき

改めまして、Final Fantasy XIV 4周年おめでとうございます！

もう2018年ですが！ 5周年目入ってますね……。やっと、公開することが出来ました。何が何でも継続して書いていこうと思いますので、今後ともよろしくお願ひします。

さて今回は紅蓮編1発目ですね。

これまでは「食後のデザート」として位置づけていましたが、まだ紅蓮編は始まったばかりで、次の拡張はもう少し先だと思

うのでコンセプトを変えていこうと思います。

紅蓮秘話の「幕間」としてお楽しみください。どこかのメインストーリーの隙間を埋める為のでもなく、誰かのエピソードを補完するでもなく、番外編みたいなイメージです。

本編ともまったく関わりありません（笑）

ただ、とても印象的だったアラミガン・クォーターの屋上庭園を出したかったのが舞台に選

び、番外編ならとタタルさんをお迎えしました。

紅蓮編は蒼天編と比べると、ガンガン前に進んでいこうぜ！って雰囲気なので、前向きに後押しできるような雰囲気にしたつもりです。

でもこうして考えると、イシュガルドの雰囲気は好きだったなーと思います。（個人的に書きやすかった）

紅蓮編が終わるまでは、元気が出るような、前向きな雰囲気です。

「幕間」をお届け出来ればと思ひます。

ということで、今回は尺の関係でここまでです。

最後までお読み頂きましてありがとうございました！

また半年後くらいにお会いしましょう（多分年末……笑）

今年も良い狼煙を上げて行きましょう！

Ramuh鯖 Yuura.Erisell

【新生エオルゼア】 [→ 感想・連絡フォーム](#)

『言行録』 『見聞録』 『近思録』

【蒼天のイシュガルド】

2周年記念小話『明かされなかった信実』

3周年記念小話『届けられなかった音義』

【蒼天秘話】 【紅蓮秘話】

Special Thanks

[SQUARE ENIX](#) 様 [FREE-LINE-DESIGN](#) 様

And... You!!

この物語はFF14の二次創作物です。本編とは何ら関係はありません。しかし、スクウェア・エニックス様より申し立てがあった場合は即刻掲載を取り下げることをお約束致します。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2018 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.